

浄土

平川

彰



浄土とは「きよらかな国土」という意味と、「国土をきよめる」という意味と、二つの意味があります。まず最初の意味で申しますと、きよらかな国土としての浄土の代表は、阿弥陀佛のおられる西方極楽国土であります。阿弥陀経には「舍利弗よ、彼の土は何が故に名づけて極楽となすや。其の国の衆生には、衆おほくの苦あることなし。但だ諸もろもろの衆のみを受くるが故に、極楽と名づく」と説いていました。阿弥陀佛の浄土ははじめは「極楽」と呼ばれていました。

極楽は「安楽国土」ともいわれ、また「安養」とも言われていますが、意味は極楽と同じであります。

しかし極楽ということと、浄土ということとは、少しく意味に違いがあります。衆とか苦とかいうことは、身体の問題であるとともに、心の問題でありまして、それぞれの人によって違いがあります。美しい景色を見ても、心に深い悲しみがある人には、楽しみを感ずることはできないでしょう。あるいはまた重病にかかり、寝たきりの人には、

少しの楽もないようですが、しかし看病してくれる人に感謝の気持ちをもったり、或いは和歌や俳句をつくることなどに熱中したりすれば、心の楽しみをうることは不可能ではないでしょう。さらにまた重い荷物を持って山を登ることは、他から強制される場合には苦痛でしょうが、しかし山登りがすきで、自分から進んで登るのであれば、身体の苦痛はあっても、心に楽しみがあるでしょう。

このように苦楽は、身体にかかわる苦楽とともに、心の感ずる苦楽がありますから、苦楽が外界にそのままあるのではないのです。

しかし極楽は、阿弥陀佛が衆生の苦しみを救わんとして、大慈悲心から建立された国土ですから、国土そのものが「安楽」の性格を持っていると思います。阿弥陀佛は衆生の苦しみを救うためには、衆生を極楽に迎えとって、悟りを得せしめる必要があると考えられたのでして、それに適するように国土を莊嚴されたのです。衆生に悟りを得せしめることより以上の、安楽はないからです。

ただここで問題になるのは、法蔵菩薩が建立せられた極楽の功德莊嚴は、凡夫のわれわれには理解できないということです。そのために善導大師は「指方立相」ということ

を説いています。善導は「定善義」の中に、「今この観門は、等しくただ方を指し、相を立てて、心を住せしめ、而して境を取らしむ。総じて無相離念を明さざるなり」と説いていまして、ここに「方を指して相を立てる」と言っています。これは「西方」が極楽浄土を観想するのにふさわしいとして、西方を指定することを「方を指す」と言っているのです。そして次の「相を立てる」とは、夕日の美しさや、日光・月光・池水・樹木、その他の自然の美しさを素材にして、極楽の莊嚴を構想することです。この「指方立相」は、観無量寿經に説かれている極楽を観想する方法であります。

「定善義」は、善導大師が著わされた「観經疏」という観無量寿經を注釈した書物の一章でして、観無量寿經に説いている「極楽浄土の観法」を解説した書物です。とくに「定善義」は、禪定に入って浄土を観想する方法を示しています。上記の引用文には「総じて無相離念を明さず」と言っています。ほんらい浄土は無相（形がない）でありまして、念（心）の対象にならない（離念）のであります。これが無相離念の意味です。その理由は、形のあるものは無常でありまして、いつかはほろびるからです。故に真実

の浄土は、形のあるものとして示すことができないのです。しかしそれでは凡夫には取りつくしまがないので、方便を設けて「指方立相の浄土」が説かれているのです。

善導大師は、前文のつづきに、次のように説いています。すなわち「如来は懸^{はるか}に知る。末代罪濁の凡夫は、相を立て心に住すとも、尚得ること能わず、何^{いか}に況んや相を離れて事を求むるは、術通なき人が空に居して、舍を立つるに似るが如し」と述べています。末代の凡夫は指方立相の方法によっても、浄土の相を得ることは容易でないのですから、相を離れて浄土の莊嚴を得ることがどうしてできようやと言っているのです。したがって指方立相の浄土を観ずることも容易ではありませんが、禪定に入って、修行をくり返せばこれを観ずることができるわけです。

次に大無量寿経にも極楽の莊嚴が説かれていますが、しかしそれを、観無量寿経の説と同じく指方立相の浄土と見することは出来ないように思います。観無量寿経では、業処観という人工的な方法で極楽を構想して、観想しておりまので、そこで見られている極楽の結構は、かなり人為的な性格があります。これにたいして大無量寿経ではこれと違ひまして、極楽をもつばら「光明の世界」として示して

います。例えば、極楽には無数の宝華がありまして、一の華は三十六百千億の光を放っていると説いています。そしてその一一の光の中に三十六百千億の佛が現われて、一の佛が百千の光明を放っていると説いています。そしてそれらの佛は、あまねく十方の衆生のために微妙の法を説いておられるといえます。

そしてその中央に居られる阿弥陀佛は、威神・光明とも最尊第一であり、その光明は百佛、千佛の世界を照らし、この佛の光明に及ぶものはないと説いております。そのため阿弥陀佛の別名を、無量の光の佛、無辺の光の佛、無礙の光の佛等と説いております。親鸞聖人は、阿弥陀佛を尽十方無礙光如来、不可思議光如来と尊称しております。このように極楽は光明に満ちあふれた世界であり、その中心におられる阿弥陀佛は尽十方無礙光如来といわれ、障えるものなく十方に光明を放っておられる佛であります。親鸞聖人の「正信偈」に、阿弥陀佛の光明を説いて、「攝取の心光つねに照護したもう」と述べています。即ち、佛の光は衆生の心の中までも照らしておられるといわれます。そしてさらに親鸞聖人は「一切の群生光照を蒙むる」と述べておられまして、衆生はこの世に生きているうちか

臨時増刊
在家佛教

特集
生と死
現代人の人生観
苦と楽

各冊 ¥1,030 ㊦71

朝比奈源	井伊文子
梅原猛	義道
江部鴨村	良慶
大山澄太	荻原井泉水
長田恒雄	勝又俊教
加藤辨三郎	金子大榮
亀井勝一郎	久保田正文
椎尾辨匡	柴山全慶
清水公照	杉靖三郎
鈴木大拙	曾我量深
竹田益州	竹中信常
竹山道雄	玉城康四郎
中根專正	中村良元
那須政隆	奈良康治
西川玄苔	西谷啓昇
西元宗助	平沢興
平川彰	平藤島達朗
藤井実応	藤本多宗
古田紹欽	松林惠文
増谷文雄	大円山田無令
松本大	靈林
山田靈林	秀雄
吉野秀雄	

在家佛教協会

東京都千代田区大手町1-6-1

郵便番号100

電話03-3214-5024 振替東京0-17765

ら、如来の光明に光被されていると見ております。しかし貪り・愛欲・瞋り・憎しみ等の煩惱の雲霧が、常に真実の信心の天を覆っているので、衆生は自己の心中までも如来の光明が照らしておられるのに、気がつかないと言っています。

このように極楽は光明に満ちあふれた世界であり、阿彌陀佛は光明そのものであるとするならば、極楽こそ「浄土」と呼ぶにふさわしい「きよらかな国土」であると言いうことが出来ます。親鸞聖人は「教行信証」の「眞佛土の巻」において、次のように説いております。すなわち「謹しんで眞佛土を按んずるに、佛とは則ちこれ不可思議光如来、土とはまた是れ無量光明土なり。然れば則ち大悲の誓願に酬

報するが故に、眞の報佛土と曰うなり」と述べておられます。すなわち極楽は「無量の光明の世界」であり、そこにおられる阿彌陀如来は、凡夫の思議することのできない光明の如来であると見ておられるのです。そしてこの佛と国土とは、法蔵菩薩の「大悲の誓願」に酬いて成立したものであるから、佛は報身の佛陀であり、国土も報土であると言われるのです。

親鸞聖人は、眞実の信心をうることによって、この如来の光明につつまれ、佛と一体となるという信仰体験を得られたのではないかと思えます。その理由は、「末灯鈔」に「信心の人をば諸佛とひとしと申すなり。また補処の弥勒とおなじと申すなり」と述べ、眞の念佛者を諸佛に等しい

と説いておられるからです。そして阿弥陀佛は「この世において真実信心の人を護らせたもう」とも言っておられます。安養浄土に往生してから護りたもうのではなく、この世において護りたもうのであると説いております。

ともかく阿弥陀如来や浄土のことは、凡夫の思慮を超えていますから、これ以上言及するのを避けたいと思います。

最初に、浄土には「きよらかな国土」の意味と共に、「土をきよめる」という意味のあることを申しましたが、この意味の浄土は般若経などに説かれているのでして、菩薩の修行道として重要であります。般若経には「菩薩摩訶薩は、一佛国より一佛国に至り、衆生を成就し、佛国土を浄める」と説いています。ここに「佛国土を浄める」すなわち「浄佛国土」の修行が説かれています。この浄佛国土の行が、菩薩の修行の基本であります。佛国土をきよめることによって、浄土すなわち「きよめられた国土」が成立するからです。大無量寿経によりますと、法蔵菩薩は世自在王佛にたいして、浄土を建立する方法を教えたことだこうとして、「諸佛如来の浄土の行を敷演したまえ」とお願ひしています。そして世自在王佛の教えにしたがって、「莊嚴佛国清浄の行」を思惟し、撰取して、兆載永劫の修

行の結果、極楽浄土を建立されたのであります。故に極楽は、法蔵菩薩の「清浄の願心」によって建立されたのであります。

故に曇鸞大師は、極楽やそこに住する佛や菩薩達のそなえる莊嚴功德は、すべて法蔵菩薩の清浄願心によって莊嚴されたものであるから、清浄であると説明しています。すなわち原因である法蔵菩薩の願心が清浄であるから、結果としての極楽が清浄であるという意味です。故に私共は、極楽の浄土を念ずるときには、法蔵菩薩の願心の清浄と、法蔵菩薩の兆載永劫の修行の清浄とを思念すべきであると思ひます。「維摩経」にも「若し菩薩が浄土を得んと欲すれば、当に其の心を浄むべし。其の心浄にしたがいて、則ち佛土浄し」と説いておりまして、菩薩が浄土を得んと欲するならば、まずその心を浄むべきであると説いております。しかし浄土の清浄の実現は、法蔵菩薩のごとき自力難行の修行をなしうる大菩薩にのみ可能なことでありまして、凡夫になしうることではないの言うまでもないこととあります。凡夫にとっては、浄土と自己とをつなぐものは、親鸞聖人が重要視された「真実の信心」であると思ひます。

(東京大学名誉教授)